

佐賀県黒髪山(516m) 新日本百名山 9月3日 晴れ

長崎に帰省した帰途、佐賀・武雄温泉駅で途中下車し、有田町の黒髪山に登った。

高齢の運転手さんは話好き

JR 佐世保線・上有田駅に 8:01 着。タクシーで有田ダム登山口に向かう。高齢の運転手さんの話によると、この町は古くから有田焼の産地であるうえ、交通の要衝として商工業が栄えたとのこと。

通過していく街並みも“街道”の趣を残して、白壁の蔵や重厚な屋根が続いている。また有田焼の窯元らしい煙突も見える。

ここにも為朝伝説が

街道からそれると話題は黒髪山に移った。昔から雨乞いの山であり、修験の山でもあったこと。そして、その山頂にある天童岩に大蛇が巻き付き、とぐろを巻いていたのを源為朝が退治したとの伝説があることなどを教えてくれた。



↑伝説に彩られた山らしく古めかしい案内板



↑クサギ(臭木)の花

だが、すぐに道は荒れ、過去の台風の傷跡なのか、路面はえぐられ、流木や土砂がそのままあちこちに堆積している。登山道は倒木や堆積土砂を避けて登っていく。誰も通らないのだろうかと思ってしまう。

突然、トチの実の落下

突然、ボタ、ボカ、ボタと派手な音をたてながら、何かが落ちてきた。複数のトチの実が高い枝から、途中の枝・葉にぶつかりながら、落下してきたのだ。頭に当たらなくてよかった。

やがて、林道から傾斜のある山道に入ると荒れ方はましになった。踏み跡はしっかりとついており、自然石での階段も各所に残っていて、かつては多くの人々が歩いたのだろうと思われた。



※平安時代の武将・源為朝(源義経＝牛若丸のおじ)は乱暴行為により、若い頃九州に配流されており、鎮西八郎と名乗り、各地で、武勇伝を残し、九州各地で為朝伝説が残されているが、黒髪山の伝説もその一つなのだろう。

懐かしい“九州の山”の感じ

8:18 登山口に着いた。明るい広葉樹林のなかの林道を上っていく。木々の梢が陽光をはね返しながらか風にたゆみ、足元のつわぶきの葉も照り輝いている。花を開きかけたクサギにへクソカズラが巻き付いて可愛い花を見せている。その悪臭ゆえにかわいそうな名前を付けられた植物たち、その異臭すら懐かしい感じだ。これが九州の山だ。幼少年期を過ごした長崎の山を歩いているような思いでゆっくりと登った。

荒れている登山道

新・日本百名山に名を連ねる山

確かに、道標やテープを見てゆけば、迷うことはないが、登山家・岩崎元郎氏が折角『新・日本百名山』に選んでくれたのだから、もう少し登りやすくしてはどうだろうか、などと考えつつ、照葉樹林を楽しみながら、ジグザグに登っていく

この日初めて人に出会う

9時丁度に登山道が交差している分岐に着いた。休憩していると別のルートから一人の登山者が登ってきた。今日会う最初の人だ。

私が「いい山ですねえ」と言うと「いい山でしょう」と答えた相手は80歳とのこと。かくしゃくとした風情。地元に住み、この山には日常的に登っておられるという。



私が、登山道が荒れていたことを言うと、「そのルートは、今、ほとんど使われていない」とのこと。

高齢登山者同士の交歓

この人も、山と花の愛好者で、スマホに収められている写真をたくさん見せてくれた。そこには、私が高校時代からよく登った長崎・多良岳のオオキツネノカミソリ、久住・大船(ダイセン)山や平治(ヒジ)岳のミヤマキリシマの群落などなど、さらには黒髪山特産種であるクロカミランやクロカミシライトソウそしてカネコシダ(天然記念物)などの画像が含まれていた。



山と花に関する情報を交換し合い、山頂への道の説明を受けて別れたが、嬉しい、為になる出会いだった。

くさり場をよじ登って頂上へ

10時過ぎに山頂稜線に出て、岩稜の道を頂上に向かう。山頂直下にある天童岩のくさり場を慎重に登り、10時45分黒髪山山頂着。

晴れわたった空をバックにアカトンボが翔んでいる。

山頂からの眺望も・・・

山頂からは四囲の山々と山麓の集落や道や鉄道などが眺められた。西側の眼

↑天童岩のくさり場



下には、湖面をきらめかせている有田ダムと、そこから急斜面を這い上っている豊かな照葉樹林の連なりが見られ、ここが「21世紀に残したい日本の自然100選」に選ばれていることも納得できた。

暖地林を存分に味わいつつ往路を下る

昼食後、山の豊かさを味わいつつ、ゆっくり下って、その日のうちに奈良の自宅に帰り着いた。

有明海とカササギを見たかった

久しぶりの帰省。7歳上の長姉とその長女、義兄(故・次姉のご主人)らと会食し、互いの健在をたしかめあって、私の目的は達せられた。さらにこの黒髪山登山と、私は満足だった。

ただ、佐賀県内を鉄道で旅しながら、車窓から有明海を見られなかったこと、そしてカササギの姿を見かけなかったこと、は寂しかった。

有明海を縁取っていた長崎本線

長崎を離れて60年が経った。当時の国鉄長崎本線は佐賀平野を横切り、肥前山口駅から諫早駅まで有明海沿いにウネウネと走っていた。トンネルと小駅とが数珠のように連なって、有明海を縁取っていた。



↑黒髪山山頂から見る有田ダム

遠浅の干潟、樹や電柱にカササギの巣

貧乏学生だった私は、他県からの帰路は、いつも鈍行(各駅停車)で、その車窓からどこまでも広がる干潟を飽きることなく眺めていた。また佐賀平野の風物詩とも言える大きな球形のカササギの巣を見るのも鈍行の旅の楽しみの一つだった。

美しいカラスの仲間=カササギ

カササギ(カラス科カササギ属・鶺鴒)は人里の鳥。佐賀県を中心に西九州の一部に生息している。体長約45cm。カラスより小型。群れを作らず、家族単位での生活。昔は「秀吉の朝鮮出兵後、鍋島藩兵が連れ帰った個体が定着」説が信じられてきたが、研究の結果この説は疑問視されているようだ。

電柱や大木の枝上に、1mに及ぶ球形の巣を作り、電車の車窓からもすぐに分かった。佐賀県の県鳥。特別天然記念物。

←カササギの図。学研版学習科学図鑑「鳥」より。

お詫び 新型コロナ罹患により288号発行が遅れたことをお詫びいたします。 松尾忠

